人 格

パーソナリティ研究の動向と今後の展望 ——パーソナリティ特性、アイデンティティを中心とした 変化・発達研究の展開に向けて——

畑 野 快
(大阪府立大学)

Current Trends, Future Perspective, and Challenges in Personality Research: Towards Extended Research on Change and Development in Personality Traits and Identity

KAI HATANO
(OSAKA PREFECTURE UNIVERSITY)

This study aims to review longitudinal research on personality traits and identity process, and suggests further developments in personality research. To accomplish these aims, the author first confirms the conceptual validity among self, identity, and personality traits based on the three standard identity theory proposed by McAdams & Zapata-Gietl (2014). Second, the author reviews longitudinal research on personality traits, and discusses how personality trait changes are explained by the social investment principle and changes in self-concept clarity, volition, and sense of adjustments. Third, the author reviews identity process research and discusses the longitudinal relationships between identity processes and psychosocial problems and the specific characteristics of identity processes in Japan. Fourth, the author reviews longitudinal research in mutual development between personality traits and identity processes and discusses how directions of association between personality traits and identity processes are different depending on developmental stages. Fifth, the author proposes the “personal investment principle” which explains the development of personality traits in adolescence. Finally, the author discusses future perspectives and challenges in personality research.

Key Words: personality traits, self, identity, development

本稿の目的は、パーソナリティ特性、アイデンティティ・プロセスに関する縦断研究を中心に概観し、パーソナリティ研究の発展可能性について論じることである。そのために、まず、McAdams & Zapata-Gietl (2014) に基づき、自己、アイデンティティ、パーソナリティ特性の概念的弁別性を確認した。次に、パーソナリティ特性の変化に関する研究を概観し、パーソナリティ特性が社会投資の原則や自己概念の明瞭性、意志によって変化すること、さらに、適応感と関わることを確認した。加えて、アイデンティティ・プロセスと健康及び日本の独自性を検討した研究を概観し、精神的健康と縦断的に関連すること、欧米とは異なる日本独自のアイデンティティ・プロセスの特徴が見出されていることを確認した。そして、アイデンティティ・プロセスの相互関連・発達に関する研究を概観し、パーソナリティ特性とアイデンティティは相互に関連すること、その関連は発達段階によって異なることを確認し、それらを踏まえ、青年期のパーソナリティ特性の変化を説明する原則として個人投資の原則を提唱した。最後に、パーソナリティ研究の発展に向けての4つの方向性を述べた。

キーワード：パーソナリティ特性、自己、アイデンティティ、発達

はじめに

本稿の目的は、パーソナリティ特性、アイデンティティに関する研究を概観し、変化・発達の観点からパーソナリティ研究の発展可能性を論じることである。パーソナリティ研究は、(a) 行動の一貫性を生じさせる特性の記述・分類とその構造の把握（例えば基本的なパーソナリティ特性の内容、次元数、生物学的基盤に関わるもの）、(b) それらの特性と個人の環境への適応の関連、の2点に集約される（高橋・山形・星野, 2011）。かつてパーソナリティ研究は、主に横断データを用いてこのような研究を進めてきたが、調査方法の洗練化と解析手法の発展に伴い、近年では縦断データを活用した研究が行われている。例えば、2019年度の日本教育心理学会総会における人格部門の発表では、縦断データを用いた研究が2件みられる。糠野（2019）は、保育者を目指す短期大学の学生122名を対象とした1年に1度の縦断調査を実施し、自己特性の変化を検討した。その結果、1時点目よりも2時点目の自己管理得点が低いことから、実習を経験することで自己評価が厳しくなる可能性を報告している。島津・中村・越川（2019）は、大学生73名を対象とした2時点の縦断調査（時点間隔は4週間）を実施し、抑うつ時の反応スタイルと抑うつとの関係を検討した結果、否定的考え込み反応が高い者ほど、4週間後の抑うつ得点が高いことを報告している。また、2018年7月から2019年6月にかけての『心理学研究』、『教育心理学研究』、『発達心理学研究』、『パーソナリティ研究』、『青年心理学研究』の研究論文を概観すると、加藤・太田・松下・三井（2018）では、中学生633名を対象とした1年に3度（時点間隔は4ヶ月）の縦断調査を3年間実施し、その発達傾向および批判的思考態度との関連を検討している。その結果、(1) 自尊感情は1時点目から2時点目にかけて低下していくこと、(2) その低下には1時点目の批判的思考態度が正の影響を及ぼすこと（i.e., 1時点目の批判的思考態度が高い中学生ほど自尊感情が低下する）ことを報告している。

パーソナリティ研究の動向を把握するためには、これら日本国内で報告された研究に加えて、国際誌にも目を向ける必要がある。近年では多くの国際誌が公開され、また、電子投稿システムが整備されたことで、国際誌への投稿が以前よりも容易になった。その影響を受け、我が国のパーソナリティ研究者は国際誌に積極的に投稿するようになっていく。実際、国際誌には膨大な量のパーソナリティ研究が掲載されているが、特にBig Fiveに代表されるパーソナリティ特性に関す

る研究は、パーソナリティ特性がある時期、特に成人期において一定の方向へと発達し¹（メタ分析としてRoberts, Walton, & Viechtbauer, 2006）、その発達が精神的健康の維持・増進と関わることを示してきた（e.g., Klimstra, Nottel, Luyckx, Goossens, & Robins, 2018）。また、パーソナリティ特性と類似の概念であるアイデンティティに関する研究においても、青年期におけるその可変性および発達の可能性を示す結果が得られている（e.g., Hatano & Sugimura, 2017）。さらには、アイデンティティがパーソナリティ特性の変化に寄与する結果を示した研究もみられ（e.g., Hatano, Sugimura, & Klimstra, 2017; Klimstra, Luyckx, Germeijs, Meeus, & Goossens, 2012）、両者は相互に関連しながら発達していく可能性がある。縦断データに基づくパーソナリティ特性、アイデンティティ研究の発展は、高橋他（2011）の定義（a）（b）に加えて、（c）パーソナリティの変化・発達の検討へと研究の射程が拡大していることを意味する。その一方で、これまでの『教育心理学年報』においてこれらの研究は紹介されておらず、また、発達の観点からのパーソナリティ研究の考察はなされていない。

以上から、本稿では国際誌を中心にパーソナリティ特性、アイデンティティに関する縦断研究に焦点を当て、それらについて概観する。まず、パーソナリティ特性とアイデンティティの関係についてアイデンティティの3層理論（McAdams & Pals, 2006; McAdams & Zapata-Gietl, 2014）に基づいて確認する。次に、パーソナリティ特性、アイデンティティ・プロセス²に関する研究を概観し、それぞれの変化・発達がどのように検討されてきたのかを確認する。さらに、パーソナリティ特性とアイデンティティ・プロセスの相互発達に関する研究を概観した上で、課題に言及し、今後のパーソナリティ研究の展望を述べる。なお、2019年度の日本教育心理学会総会における人格部門の発表件数は11件であり、部門別の発表件数としては最も少ない。筆者はパーソナリティ研究の発展という点からこの現状に強く危機感を抱いており、本稿がその発展の一助となればこれほど嬉しいことはない。

¹ ここでの発達とは一定の方向性をもち、かつ機能的に増分を示す発達と呼べる変化のことを指す（e.g., Côté & Bynner, 2008）。

² Marcia（1966）による探求、コミットメントは、アイデンティティが達成するまでのプロセスを表した概念であり、探求・コミットメントに基づく研究はアイデンティティ・プロセス研究と呼ばれる。

3つのアイデンティティ自己、アイデンティティ、パーソナリティ特性の関係から

パーソナリティ特性とアイデンティティはどのように概念的に弁別されるのか。McAdamsらは、自己、アイデンティティを鍵概念とし、それぞれの違いを説明する (McAdams & Pals, 2006; McAdams & Zapata-Geitl, 2014)。アイデンティティとは、「自己斉一性と連続性が明確であること、さらに他者の承認から得られる自信」である (Erikson, 1980 西平・中島訳 2011)。言い換えると、自我が自己を空間的に斉一するように、また過去・現在・未来と時間的に連続するように自己をまとめた結果得られる自己一致の感覚がアイデンティティである。ここで自我とはIであり、対象化されている自己はMeであるとする (e.g., James, 1890/1950)、アイデンティティとは、Iが過去、現在、未来と時間的に連続するように、そして空間的に斉一するように一定のパターンでMeを配置することであり、その特徴を表す概念である。この感覚は、Iが様々な場面におけるMeを概観し、一貫していると認識して初めて生じる。例えば、状況を通じて「勤勉な自分」を自分らしいと感じている人は、過去・現在に他者と関わってきた様々な自分を自己として対象化し、自我がそれらの自己を「勤勉だ」と判断するため、「勤勉な自分」が自分らしいと感じる。すなわち、自分は「勤勉だ」という認識は、Meの一定のパターンを鑑みた上でIがそのように判断した結果得られている感覚である。そして、このパターンは他者³からの承認によって強固になり、その結果、人は自分が自分であるという感覚をいっそう確かなものとするのである。

このようなMeの一貫したパターン (i.e., アイデンティティ) はどのようにして形成されるのだろうか。McAdamsらは、その形成過程と特徴に沿ってアイデンティティを次の3つに分類する。1つ目は、人が社会的に求められた役割を演じることで形成するアイデンティティである。特定の集団における役割は、人に特定の振る舞いを求め、また、人も役割に沿って振る舞う。例えば、紀元前の時代において、男性は狩りに、女性は家庭を守ることが社会的役割であったが、これらの役割は単なる役割にとどまらず、狩りに出る男性はより攻撃的に、逆に家庭を守る女性はより受容的というように人の振る舞いに強く影響を及ぼしたと考えられる。近代では、男性は男性らしく振る舞い、女

性は女性らしく振る舞うように求めるジェンダーが、現代においては、民族性や社会階層がそういった役割に相当する。そして、役割を求める社会的風潮が強いほど、人はその求められる役割に沿って振る舞うようになる。この変化は、言い換えると、Iが社会的風潮に沿って強固なMeのパターンを形成していくことにほかならない。そして、この役割に沿って形成されたMeの一定のパターンは特性 (traits) と呼ばれる。すなわち、パーソナリティ特性とは、人が社会・集団において求められる役割に乳幼児期から応え、自己帰属させてきた結果形成されたMeの一貫したパターン (i.e., アイデンティティ) とみなすことができる。

2つ目は、目的、価値、人生設計を探求し、またそれらにコミットメントすることで形成されるアイデンティティである。人は、常に求められる社会的役割に応えようと行動するわけではなく、目的的に行動する。特に、人は青年期になると大人社会へ移行するために自らの価値や目的、人生を目標志向的に選択・決定する (Kroger, 2004)。近代以前とは異なり、現代において人は役割を超えて目標、価値、人生設計を主体的に選択し、決定することができる (Côté & Levine, 2016)。こういった将来への目標志向性は、社会的役割に基づく特性を越えて、人の行為者 (agency) としてのMeのパターンを生み出す。つまり、ここでのアイデンティティとは、目標に動機づけられた行為者として、あるいは目標、価値、人生設計に対する探求・コミットメントを通して形成されるMeの一貫したパターンである。このようなアイデンティティは、アイデンティティ・プロセスに関する研究を中心に進められてきた⁴。

3つ目のアイデンティティは、自らのライフストーリーを通して語られるアイデンティティであり、ナラティブ・アイデンティティと呼ばれる。アイデンティティが、自己斉一性・連続性に関する主観的な自己一致の全体的な感覚であることを考慮すると (Erikson, 1968)、第1、第2のアイデンティティは、全体ではなく部分的なMeの一貫したパターンと言える (e.g., Syed & McLean, 2016)。それに対して、McAdamsらは、人生についてのナラティブに自己の全体的な斉一性・連続性が内在化されていると考える。なぜなら、ナラティブにおける語り手はI、語られる自己はMeであり、人

³ ここでの他者とは個人にとっての重要な他者から文化・社会と多様な意味を持つ (杉村, 1998)。

⁴ この他にも、人の希望、目標や恐怖を体系化し、意味づける可能自己 (Markus & Nurius, 1986)、個人の達成目標を積極的に達成しようとする接近、逆に避けようとする回避に沿って分類する達成目標研究 (Elliot, 1999) がここでのアイデンティティに含まれる (McAdams & Zapata-Geitl, 2014)。

生についてのナラティブとは、Iが過去・現在・そして未来のMeを再構成・統合する作業にはかならないからである。そして、ナラティブを一連のストーリーに位置づけるためには、自伝的推論スキル (autobiographical reasoning skill) が深く関わっている。それは、(1) 自らの人生について体系だったテーマを立てること、(2) 自らの発達を説明するために自分のエピソードを因果的なつながりに結びつけること、(3) 絶えず個人の成長を描くこと、(4) 自らの人生ナラティブの始まりと終わりを明確にすること、(5) 伏線、回顧的反芻そして他の自己史のポイントを統合するスキルである (e.g., McLean & Breen, 2009)。ナラティブ・アイデンティティの発達はこういったスキルの発達に基づき、自らの人生について語ることの起伏を表す。

McAdams らは、アイデンティティをIとMeの関係で捉え、パーソナリティ特性、アイデンティティ・プロセス、ナラティブ・アイデンティティを Figure 1 のように整理し、それぞれ生涯を通して発達すると考える。そして、これらの発達は、それぞれのアイデンティティによって維持・促進され、逆に阻害される。特に、第1のアイデンティティ (i.e., パーソナリティ特性研究)、第2のアイデンティティ (i.e., アイデンティティ・プロセス研究) は、それぞれの変化、相互発達および精神的健康との関連を検討した研究が蓄積されてきた。それに対して、ナラティブ・アイデンティティに関し

て、その発達や他のアイデンティティとの相互発達に言及した研究は極めて少ない。これらを踏まえ、本稿では特にパーソナリティ特性、アイデンティティ・プロセスに関する研究に着目し、概観する。

パーソナリティ特性の変化・発達

パーソナリティ特性が社会・集団において求められる属性に人が応えることで形成されるのであれば、その役割や求められる属性が変われば特性もまた変わっていく (McAdams & Zapata-Gietl, 2014)。Roberts et al. (2006) は、Big Five に関する研究をメタ分析した結果、児童期から老年期にかけて特性間の相関係数 (rank-order) は、高い値で安定している (i.e., 変化しない) もの、平均値 (mean level) は変化することを見出した。この結果は、パーソナリティ特性は、特定の集団における位置づけ (rank) は大きく変わらないが、個人の得点は変化することを意味する。特に、30—40 歳の成人期はそれまでと比べて情緒安定性、勤勉性、協調性が高い。これらのパーソナリティ特性は、社会に対して適応的な特性と考えられていることから、この高まりはパーソナリティ特性の成熟 (あるいは発達) と言える。そして、この成熟は、人が家族、仕事など大人としての社会的役割に積極的に投資した結果であると解釈されており、これを社会投資の原則 (social investment principle) と呼ぶ (Lodi-smith & Roberts, 2007; レビューとして Roberts &

主客としての自己 (I)

Figure 1 アイデンティティを分類する3つの基準 (McAdams & Zapata-Gietl, 2014 より筆者が作成)

Nickel, 2017)。パーソナリティ特性に関する研究では、成人を対象とした縦断調査に基づいて社会投資の原則の検証を試みた研究が多くなされてきた。ただし、社会投資の原則はパーソナリティ特性の変化に言及した原則の1つにすぎず、その他の要因もまたパーソナリティ特性の変化に寄与することが明らかになっている。ここでは社会投資の原則に関する研究に加えて、パーソナリティ特性の変化を促す要因および精神的健康との関係を検討した研究を紹介する。

社会投資とパーソナリティ特性の変化

社会投資の原則に関して特に注目されてきた役割とは、愛情に関するもの（恋愛関係、結婚、離婚、養育、死別）、仕事に関するもの（学校や大学、初職・転職・失業・退職の経験）である（レビューとしてBliedorn, Hopwood, & Lucas, 2018）。これらの研究をいくつか取り上げると、異性との間に親密な関係を築くことは、情緒安定性を高めることが報告されている。Lehnart, Neyer, & Eccles (2010) は、アメリカの20—21歳の青年940名の3時点での縦断データを用い（時点間隔は4年間）、それらの青年の中でも8年間を通じて（1）パートナーがいない成人群（ $N=64$ ）、（2）2時点目の調査においてパートナーができた成人群（ $N=161$ ）、（3）パートナーと関係が続いている成人群（ $N=51$ ）に着目し、それぞれの群間で、自尊感情、怒り、衝動性、抑うつ、社会不安の得点を比較した。その結果、（2）群は他の群に比べて、自尊感情の得点が高く、衝動性、怒り、抑うつの得点が低かった。この結果は、パートナーとの間に親密な関係を築くことで情緒が安定していく（*i.e.*, 衝動性、怒り、抑うつ得点が低い）可能性を示唆している。

逆に、離婚や死別といったネガティブなライフイベントは外向性を望ましくない方向へと変化させる。Allemand, Hill, & Lehmann (2015) では、ドイツの成人42—46歳の526名を対象とした3時点の縦断調査を活用し（1時点目と2時点目の間隔は4年間、2時点目と3時点目の間隔は8年間）、離婚を経験していない成人（ $N=383$ ）と経験した成人（ $N=143$ ）でパーソナリティ特性の変化の違いを検討している。階層線形モデルによるマルチレベル分析を行った結果、離婚を経験した成人はそうでない成人よりも3時点目（*i.e.*, 12年後）の外向性の得点が顕著に低下したことを報告している。

仕事とパーソナリティ特性の関係を検討した研究からは、仕事に積極的に関わることが勤勉性を高め、逆に失業することは協調性、勤勉性、開放性を低下させることが報告されている。Leikas & Salmela-Aro (2015) は、フィンランドの成人20歳597名を対象とした2時

点での縦断データを用いて（時点間隔は3年間）、パーソナリティ特性と仕事、他者との関係、学業に対する熱心さ、ドラッグの使用頻度、慢性疾患の重症度との関係を交差遅延効果モデル（Cross-Lagged Panel Model: CLPM）によって検討した。その結果、仕事への積極的な関与が神経症傾向に負の影響、勤勉性に正の影響を及ぼすこと、他者と親密な関係を築こうとすることが勤勉性に正の影響を及ぼすことを報告している。

一方、Boyce Wood, Daly, & Sedikides (2015) は、ドイツの17—61歳の有職者の成人6,769名に対する2時点の縦断データ（時点間隔は4年間）を用いて、失業とパーソナリティ特性の変化との関係を検討している。その際、2時点において（1）失業していない者（ $N=6,308$ ）、（2）失業した者（ $N=210$ ）、（3）失業したものの職を得た者（ $N=251$ ）の3つに分類し、さらに性別を考慮した上でパーソナリティ特性の変化について潜在変化モデルを用いて検討した。その結果、失業者は有職者に比べて協調性、勤勉性、開放性が全体的に低下する傾向にあるが、その低下の軌跡は性別によって異なる結果が報告されている。これらの結果は、他者との親密な関係や仕事に関する投資がパーソナリティ特性の変化に寄与する可能性を示唆しており、社会投資の原則を支持する結果であると言える。

その一方で、社会投資の原則を支持しない結果も報告されている。Van Scheppingen et al. (2016) は、大人の役割として親になることに着目し、オーストラリアの17—45歳の青年・成人2,469名に対する2時点の縦断データ（時点間隔は4年）を用いて、子どもがいる青年・成人群（ $N=772$ ）、子どもがいない青年・成人群（ $N=1,697$ ）それぞれのパーソナリティ特性の得点を、潜在変化モデルによって比較した。その結果、親になっている群とそうでない群で外向性、勤勉性の得点の変化に差がみられた。しかし、縦断データにおいて、親になることとパーソナリティ特性の変化に影響を及ぼすと考えられる共変量（*e.g.*, 年齢、収入、人生満足感等）を傾向スコア（propensity score）として算出し、親になっている青年・成人群とそうでない群とをマッチングさせた上で、パーソナリティ特性の変化を検討したところ、両群の差がみられなくなった。特に、外向性は親である群・なっていない群でともに顕著に低下することを報告している。

また、Hudson, Roberts, & Lodi-Smith (2012) は、アメリカの有職者の20—61歳391名に対する2時点の縦断データを用いて（時点間隔は4年）、仕事に対する心理的な投資の変化とパーソナリティ特性の変化の関係を

潜在変化モデルで検討した。その結果、仕事に対して積極的に関わることと勤勉性の変化との間に正の関連が見出されたが、その結果は成人期に限らず、老年期においてもみられることを報告している。これら2つの研究について、Roberts & Nickel (2017) は、親になるという役割についての共通の定義、測定がなされていないこと、社会投資の原則が必ずしも成人期にのみ当てはまるわけではない可能性があると考えしている。**自己概念の明瞭性、意志、適応とパーソナリティ特性の変化**

社会投資以外の要因に着目し、パーソナリティ特性の変化との関係を明らかにする研究の1つがアイデンティティ⁵の原則に基づく検討である。アイデンティティの原則とは、人のパーソナリティ特性の安定性は生涯を通じて高まっていくが、それは自己全体の評価の一貫性 (i.e., アイデンティティ) の高まりに起因すると考える原則である (Roberts & Nickel, 2017)。Lodi-Smith, Spain, Cologgi, & Roberts (2017) は、自己全体に関する評価の一貫性として自己概念の明瞭性 (self-concept clarity; Campbell et al., 1996) に着目し、アメリカの19—86歳の青年・成人を対象に実施した縦断調査における2時点のデータ (時点間隔は3年間) を用いて、自己概念の明瞭性の変化とパーソナリティ特性の変化との関連を潜在変化モデルによって検討した。その結果、性別、年齢を通して自己概念の明瞭性の得点の変化と、勤勉性、協調性、情緒安定性の得点の変化の間に正の関連がみられたことを報告している。この結果は、自己概念の明瞭性、パーソナリティ特性がともに高まっていく可能性を示唆しており、アイデンティティの高まりがパーソナリティ特性の一貫性と関連すると考えるアイデンティティの原則を支持していない。

また、これまで多くの縦断データが1年あるいは数年に1度という比較的長期にわたる調査期間であったことに対して、経験サンプリングによってデータを収集し、パーソナリティ特性の変化のメカニズムを明らかにしようとする研究も見られる。Hudson, Briley, Chopik, & Derringer (2019) は、20歳前後のアメリカ人成人377名に対し、15週間にわたって毎日パーソナリティ特性を測定した。そして、彼らを(1) パーソナリティ特性を変えようとする意志がある成人、(2) そうでない成人に分類し、パーソナリティ特性の月ごとの

得点を比較した。その結果、(1)の成人は(2)の成人よりも外向性、協調性、情緒安定性の得点が高くなることを報告している。この結果は、短期間の場合、人のパーソナリティ特性は自然に変化するのではなく、変えようとする意志があって初めて変化する可能性を示唆している。

一方、パーソナリティ特性が変化することで精神的健康を促し、また、精神的健康が変化することでパーソナリティ特性の変化を促す (e.g., Takahashi, Edmonds, Jackson, & Roberts, 2013)。Klimstra et al. (2018) は、アメリカ、ベルギーの大学生785名を対象とし、2年間の縦断データを用いて、パーソナリティ特性と自尊感情、社会的適応観、学業適応との関連を交差遅延効果モデル (CLPM) によって検討している。その際、パーソナリティ特性を Big Five だけでなく、いくつかの下位概念 (i.e., facet) に分類し、両者の関係を詳細に検討した結果、両者の関係は双方向であること、また下位概念によってその関係は変わること、特に、自尊感情とは神経症傾向、協調性、勤勉性が、社会適応感とは神経症傾向、勤勉性が、学業適応とは神経症傾向、勤勉性がそれぞれ関連する結果を報告している。これらの結果は、パーソナリティ特性は自己・社会・学業に関する適応と関連すること、またその関係はパーソナリティ特性の上位-下位概念によって変化する可能性を示唆している。

アイデンティティ・プロセスの変化・発達

第2のアイデンティティの変化・発達は、特にアイデンティティ・プロセス研究で検討されてきた。アイデンティティ・プロセス研究とは、Marcia (1966) のアイデンティティ・ステータスを元に考案された3次元モデル、5次元モデルに基づく研究を指す (Figure 2, Figure 3)。3次元モデルは、青年の教育的信念、対人関係に関する探求・コミットメントに着目し、コミットメント、コミットメントの再考、深い探求の3つからアイデンティティの発達プロセスを捉える (Crocetti, Rubini, & Meeus, 2008; Meeus, Van de Schoot, Keijsers, Schwartz, & Branje, 2010)。5次元モデルは、青年がアイデンティティを探求する領域として将来に着目し、広い探求、深い探求、コミットメント、コミットメントとの同一化、反芻的探求の5つからアイデンティティ発達のプロセスを捉える (Luyckx et al., 2008)。それぞれのモデルに基づく尺度が2008年に開発されて以降、それらを用いた実証的研究が世界中で実施され、その知見が蓄積されている (レビューとして畑野, 2019)。3次元、5次元モデ

⁵ Roberts & Nickle (2017) は自己評価の一貫性をアイデンティティと呼んでおり、Erikson のアイデンティティの一部ではあるものの、その意味は時間的連続性・斉一性という観点からするとやや異なる。

Figure 2 アイデンティティ・プロセスの3次元モデル (畑野, 2018 を改変)

Figure 3 アイデンティティ・プロセスの5次元モデル (畑野, 2018 を改変)

ルに基づく研究は、(1) 探求・コミットメントの特徴を検討する研究と、(2) クラスタ分析や潜在クラス分析によってアイデンティティ・ステータス（あるいはクラス）を抽出し (Table 1)、全体的なパーソナリティの特徴を検討する研究に分類される (Crocetti & Meeus, 2014)。

アイデンティティ・プロセス研究では、(1)、(2)ともに精神的健康との縦断的関連を検討した研究が多く見られる。加えて、2018—2019年においては、日本人青年を対象とした調査から我が国独自のアイデンティティ・プロセスの発達や特有の宗教意識、問題行動 (i.e., ひきこもり) との関連について検討した研究が進められている。これらの研究については横断データを用いているものも見られるが、日本独自の社会・文化的知見を報告していることから、それらの研究もあわせて紹介する。

アイデンティティ・プロセスと精神的健康

アイデンティティ・プロセスの研究に関しては、探求・コミットメントと精神的健康との関係を、Random Intercept Cross-Lagged Panel Model (RI-CLPM) を用いて検討した研究がいくつか見られる。このモデルは、通常の交差遅延効果モデル (CLPM) が個人間 (between-person level) の相関関係から因果の方向性を検討するモデルであるのに対して、変数ごとにランダム切片を潜在変数として抽出し、独自因子間に交差のパスを仮定することで個人内 (within-person level) の共変関係について因果の方向性を検討するモデルであり、CLPM よりも因果関係に踏み込んだ変数間の関係を明らかにすることが可能である (Hamaker, Kuiper, & Grasman, 2015)。

Becht et al. (2017) は、オランダの13—18歳の青年494名を対象として年に1度の調査を5年間実施し、3

Table 1 Marcia, 3次元モデル, 5次元モデルに基づくアイデンティティ・ステイタス（あるいはクラスタ）とその特徴

アイデンティティ・ステイタス（あるいはクラスタ）			アイデンティティ・ステイタス （あるいはクラスタ）の特徴
Marcia	3次元モデル	5次元モデル	
達成	達成	達成	自己の価値観を探索し、コミットメントしている状態。
早期完了	完了	完了	重要な他者の価値規範をもとにコミットメントしている状態。
モラトリアム	モラトリアム	モラトリアム	探索の渦中にある状態。
—	探索型モラトリアム	探索型モラトリアム	自らの求める価値規範にコミットメントしながらも新たな価値規範を模索している状態。
拡散	拡散	拡散型モラトリアム	探索・コミットメントせず、五里霧中の状態。
—	—	無問題型モラトリアム	価値規範について探索・コミットメントしていないが特に問題を感じていない状態。
—	—	未分化	アイデンティティ・ステイタスの移行状態。

次元モデルを用いて、アイデンティティ・プロセスの相互の影響をRI-CLPMによって検討している。その結果、対人関係領域においては、コミットメントの再考がコミットメントに正の影響を及ぼす一方で、教育領域においては、逆に、コミットメントがコミットメントの再考に負の影響を及ぼしていた。この結果は、領域によってアイデンティティ発達の経路は異なること、特に、対人関係領域においては、青年の葛藤が長期的にはコミットメントへとつながっていく可能性があることを報告している。

Mercer, Crocetti, Branje, Van Lier, & Meeus (2017) は, Becht et al. (2017) と同様のデータを用いて、3次元モデルと非行との関連をCLPM, RI-CLPMの両方で検討を行っている。CLPMの結果、非行はコミットメントに負の影響、コミットメントの再考に正の影響を及ぼしていた。また、RI-CLPMの結果は、非行がコミットメント、コミットメントの再考に影響を及ぼすこと、さらに、深い探求が非行に影響を及ぼしていた。これらの結果は、非行はコミットメントの発達を阻害する危険因子であること、逆に深い探求は非行を抑制する可能性があることを報告している。

Becht et al. (2019) は, Becht et al. (2017) のデータに加えてベルギーの青年1,021名を対象とした年に1度の縦断調査を5時点で行い、3次元モデル、5次元モデルのコミットメント評価次元 (i.e., コミットメントとの同一化、深い探求、反芻的探求) と抑うつとの関係をRI-CLPMによって検討している。その結果、3次元モデルに関しては、コミットメントの再考のみが抑うつに正の影響を及ぼしていた一方で、コミットメント、深い探求と抑うつとの間に関連はみられなかった。5次元モデルに関しても同様に、反芻的探求のみが抑うつに正の影響を及ぼしており、コミットメントとの同一化、深い探求と抑うつとの間に関連はみられなかった。

これらの結果は、コミットメントの再考、反芻的探求が抑うつを促す危険因子であり、それぞれがアイデンティティ・プロセスにおける不適応的側面 (dark side) である可能性があることを報告している。

Hatano, Sugimura, & Luyckx (2020) は, 14歳の日本人青年357名に対して1年間に1度の縦断調査を3年間実施し、5次元モデルにおけるコミットメント形成次元 (コミットメント、広い探求、反芻的探求) を用いて、それぞれと抑うつ、行為症 (conduct problems) との因果の方向性をCLPM, RI-CLPMによって検討している。CLPMの結果、抑うつが反芻的探求に正の影響を、行為症が広い探求に負の影響を及ぼしていた。その一方で、RI-CLPMの結果、反芻的探求が抑うつ、行為症に正の影響を及ぼしており、コミットメント、広い探求は抑うつ、行為症と関連していなかった。これらの結果は、アイデンティティと心理的問題の因果の方向性は個人間 (between-person level) と個人内 (within-person level) で異なること、また、個人内 (within-person level) において反芻的探求は、抑うつ、行為症を予測する強い危険因子になる可能性を報告している。

これらの知見は、(1) アイデンティティ・プロセスと精神的健康の因果の方向性は個人間 (between-person level) と個人内 (within-person level) では異なる、(2) 青年期前期において、個人内の結果ではコミットメントの再考が抑うつを、反芻的探求が抑うつ、行為症を予測する危険因子であるという2点にまとめることができる。

日本独自のアイデンティティ・プロセスの特徴

アイデンティティの発達は、文化・社会と密接に関連していることから (Phinney & Baldelomar, 2011), その国独自のアイデンティティの変化・発達を検討する研究もまた世界各国で進められている (e.g., Galliher, McLean, & Syed, 2017; Hatano & Sugimura, 2017; 日本の研究のレ

ビューとして Sugimura, 2020)。とりわけ日本では、アイデンティティ発達の特徴、アイデンティティ・プロセスと宗教意識の関係、またひきこもりとの関係を検討した研究が見られる。Hatano, Sugimura, Crcetti, & Meeus (2020) は、日本人青年のアイデンティティ発達の軌跡および精神的健康との関連を明らかにするために、13歳と16歳の青年に対し、1年に1度の縦断調査を4年間実施し、3次元モデルに基づく教育的探求・コミットメント、対人関係の探求・コミットメント (Figure 2 参照) の発達の軌跡と、精神的健康との関連を明らかにしている。潜在成長クラス分析 (latent class growth analysis; Nagin, 2005) を行った結果、教育的アイデンティティは4つの固定的軌跡 (i.e., 達成, 探索型モラトリアム, モラトリアム, 拡散) と変動的軌跡 (i.e., 拡散からモラトリアムへ), 対人関係領域では3つの固定的軌跡 (i.e., 達成, 探索型モラトリアム, モラトリアム) と2つの変動的軌跡 (i.e., D-M-D と M-D-M)⁶ に分類されることが明らかになっている。さらに、それぞれの軌跡への所属確率と、主観的 well-being, 内在・外在的問題との関連を検討したところ、コミットメントが高い達成型, 探索型モラトリアムは主観的 well-being と正の関連を、内在・外在的問題とは負の関連を、コミットメントが低い残りの軌跡は逆の結果を示していた。さらにこれらの関連は、対人関係領域よりも教育領域において顕著であったことを報告している。この結果は、オランダ、ベルギーで得られたアイデンティティ・プロセスの軌跡と固定的軌跡が得られた点については一致していた一方で (Luyckx, Klimstra, Schwartz, & Duriez, 2013; Meeus, Van de Schoot, Keijsers, & Branje, 2012), 変動的軌跡は日本でのみ見られた特徴であった。

Sugimura, Matsushima, Hihara, Takahashi, & Crocetti (2019) は、日本人の宗教性とアイデンティティとの発達を明らかにするために、大学生 969 名を対象とした調査を行い、3次元モデルと宗教的意識との関係について検討を行った。ここでの宗教的意識とは、神や仏の存在を信じる「神仏の関与的存在」、心の平穏に関する宗教の意義を表す「宗教肯定」、自然の神秘さについての信念を表す「自然・神秘」を表す (西脇, 2004)。3次元モデルとの関連についてパス解析を行った結果、コミットメントは「神仏の関与的存在」、「宗教肯定」に

正の影響、コミットメントの再考は「神仏の関与的存在」、「宗教肯定」、「自然・神秘」に正の影響を及ぼしていた。また、3次元モデルに対してクラスタ分析を行い、青年を5つの群 (達成, 早期完了, モラトリアム, 拡散, 探索型モラトリアム) に分類し、それぞれの群の宗教意識の得点を比較したところ、探索型モラトリアム群において、3つの宗教意識が全て特に高いことが報告されている。これらの結果は、日本人青年は、自らのアイデンティティについて迷い・再考することと宗教的自信の高まりとの間に関連があることを示唆している。これまで日本人青年の宗教的意識とアイデンティティの間には関連がないとされてきたが (e.g., 無藤, 1979), そうではなく、アイデンティティを模索する (i.e., コミットメントの再考) 上で宗教的意識が関与する可能性を示唆した点で意義深い。

また、Hihara らは、アイデンティティの不適応的な発達プロセスとして、青年が社会的に望ましくない役割・対象に積極的にコミットメントする否定的アイデンティティに着目し、そのような否定的アイデンティティとの関わりは、健康的なアイデンティティの発達を阻害する可能性を指摘する (Hihara, Sugimura, & Syed, 2018)。実際、Hihara, Umemura, & Sugimura (2019) は、日本の若者 2,313 名を対象とした横断調査を実施し、彼らを自己肯定群, 否定群, バランス群に分類した後、社会に対して持つ信念との関連を検討している。その結果、否定群 (i.e., 否定的アイデンティティ群) の青年はその他の青年よりも、社会の複雑な事象を明確に分割する二分法的信念 (e.g., 敵か味方しかいない) および社会に対する敵意の得点が高く、その後の健康的なアイデンティティの発達に困難を抱える可能性を示唆している。

Hihara, Ishibashi, Umemura, & Sugimura (2019) では、日本人青年の不適応的特徴として「ひきこもり」を取り上げ、青年 2,313 名を対象とした調査から、3次元モデルとの関連を検討している。まず、教育領域、対人関係領域において、それぞれでクラスタ分析を行い、青年を6つのアイデンティティ群 (達成, 早期完了, モラトリアム, 拡散, 探索型モラトリアム, 未分化) に分類した後、それぞれのアイデンティティ群の重なりから教育・対人関係統合群 (configuration) を抽出している。それぞれの群ごとにひきこもり得点を比較した結果、教育・対人関係領域ともにモラトリアム, 拡散の群に分類された青年は、特にひきこもり得点が高い傾向にあることが報告されている。

⁶ D-M-D とは 1 時点目では拡散 (diffusion) であったものの、2 時点目、3 時点目はモラトリアム (moratorium), 4 時点目には再び拡散に陥る軌跡、M-D-M とは、1 時点目ではモラトリアムであったものの、2 時点目、3 時点目は拡散、4 時点目には再びモラトリアムに陥る軌跡である。

パーソナリティ特性とアイデンティティ・プロセスの相互変化・発達

パーソナリティ特性とアイデンティティ・プロセスはどのように関連し、相互に発達するのか。Robertsらはパーソナリティ特性がどの年代においても変化すると考えた上で（全体性の原則; Roberts & Nickel, 2017）、特に成熟の傾向がある成人期に着目した（Lodi-Smith & Robert, 2007）。しかし、青年期においてもパーソナリティ特性、特に情緒安定性、外向性（i.e., 社会的地位）、開放性は他の年代に比べて大きく変化する（Roberts et al., 2006）。この変化の原因について Roberts らは特に言及していないが、Klimstra らは、投資と探求・コミットメントの関係に着目し、パーソナリティ特性研究とアイデンティティ・プロセス研究の架橋を試みている（レビューとして Klimstra & Van Doeselaar, 2017）。上述したように、社会投資の原則とは、成人が家族・仕事など社会的役割に投資し、その結果、パーソナリティ特性が変化・発達するという原則である。ここでの投資とは、自らの時間・心的資源を割くことであり（Lodi-Smith & Roberts, 2007）、これは、社会的に求められる特定の役割を探求し、見出し、それに対して積極的に関わることに他ならない。つまり、投資とは役割を探求し、コミットメントすることと言える。そうであるならば、青年期におけるパーソナリティ特性の変化・発達は、特定の役割に投資すること、言い換えると特定の役割を探求し、またコミットメントすることで促されると考えられる（Klimstra & Van Doeselaar, 2017）。

このような考えに基づき、Klimstra et al. (2012) は、ベルギーの大学生 475 名を対象に 1 年に 1 度の縦断調査を 4 年間実施し、パーソナリティ特性と教育領域における探求・コミットメントとの関連を検討した。潜在成長曲線モデルによってパーソナリティ特性の関連を検討した結果、コミットメントとの同一化の傾き（i.e., slope）は、神経症傾向の傾きと負の関連、外向性、協調性、勤勉性の傾きと正の関連を示した。深い探求の傾きは、開放性、勤勉性の傾きと正の関連を示した。また、CLPM によって両者の因果の方向性を確認したところ、概ねパーソナリティ特性がコミットメントとの同一化、深い探求を予測する結果が得られた。具体的には、神経症傾向はコミットメントとの同一化に負の影響、外向性はコミットメントとの同一化、深い探求に正の影響、協調性はコミットメントとの同一化に正の影響、勤勉性はコミットメントとの同一化、深い探求に正の影響を及ぼしていた。一方、アイデンティ

ティ・プロセスがパーソナリティ特性に先行したものとして、コミットメントとの同一化が神経症傾向に負の影響を及ぼしていた。

また、Klimstra et al. (2013) は、対人関係領域におけるコミットメント・探求とパーソナリティ特性との因果の方向性を検討した。CLPM を行った結果、両者の関係は概ね双方向であった。具体的に、コミットメントとの同一化は、開放性、勤勉性に正の影響を及ぼしていた。また、神経症傾向はコミットメントとの同一化に負の影響、外向性はコミットメントとの同一化に正の影響、勤勉性は深い探求に正の影響を及ぼしていた。さらに、パーソナリティ特性と 3 次元モデルとの関係について、性別を考慮した上で、CLPM を行った結果、男女ともに双方向の関係がみられた。男性に関しては、コミットメントとの同一化が協調性に正の影響、コミットメントの再考が協調性に負の影響を及ぼし、また、神経症傾向がコミットメントの再考に正の影響を及ぼしていた。女性に関しては、コミットメントの再考が協調性に負の影響、神経症傾向がコミットメントの再考に正の影響を及ぼしていた。

さらに、Boer, Klimstra, Branje, Meeus, & Denissen (2019) は、青年が大人に移行するタイミングとして職を得ることに着目し、大学にいる青年群（ $N=226$ ）、大学から半社会人へと移行する青年群（ $N=387$ ）、大学から社会へと移行した青年群（ $N=287$ ）に分類した後、パーソナリティ特性の得点の変化と 3 次元モデルの得点の変化の関係を検討した。その結果、パーソナリティ特性の変化と探求・コミットメントの変化の関係はそれぞれの群によって調整されないこと、探求・コミットメントがパーソナリティ特性に影響を及ぼさなかったことを報告している。

一方、将来に対する探求・コミットメントとパーソナリティ特性の関係に着目した研究として、Luyckx, Teppers, Klimstra, & Rassart (2014) は、ベルギーの 12—21 歳の青年 1,037 名を対象に年に 1 度の縦断調査を 4 年間実施し、パーソナリティ特性と 5 次元モデルとの関係を検討した。CLPM によって両者の因果の方向性を検討したところ、概ねパーソナリティ特性が探求・コミットメントを予測する結果が得られている。具体的には、情緒安定性が深い探求に負の影響を、外向性が反芻的探求に負の影響を、開放性が広い探求、深い探求、反芻的探求に正の影響を、勤勉性が反芻的探求に負の影響をそれぞれ及ぼしていた。探求・コミットメントからパーソナリティ特性への影響としては、反芻的探求が勤勉性に負の影響を及ぼしていた。

Hatano et al. (2017) は、13 歳（青年期前期群）、16 歳（青年期中期群）の青年 1,236 名を対象とした 1 年に 1 度の縦断調査を 2 年間実施し、パーソナリティ特性と 5 次元モデルとの関連を CLPM で検討した。その結果、それぞれの年齢群ともに、パーソナリティ特性と探求・コミットメントは双方向の関係であり、特に開放性・外向性と、探求との間に関連がみられた。具体的に、前期群においては、外向性、開放性が広い探求に正の影響を及ぼし、広い探求、反芻的探求が開放性、深い探求が外向性に正の影響を及ぼしていた。青年期中期群においては、開放性が広い探求、深い探求に、外向性が深い探求に正の影響を、勤勉性が反芻的探求に負の影響を、深い探求が勤勉性に正の影響を、反芻的探求が協調性に正の影響をそれぞれ及ぼしていた。またこれらの関係は、パーソナリティ特性の次元 (i.e., facet) によっても変わり、複雑な関係を示すことが報告されている。これらの結果は、青年期前期・中期において、パーソナリティ特性と将来に向けての探求・コミットメントは特に、開放性・外向性と探求との間で双方向に関連していること、両者の関連は下位次元になるにしたがってより複雑になる可能性を示唆している。

以上の結果は、(1) パーソナリティ特性と将来についての探求・コミットメントは、青年期前期・中期において、外向性・開放性と探求を中心に双方向的に関連すること (Hatao et al., 2017; Luyckx et al., 2014)、(2) 青年期後期において、パーソナリティ特性（特に神経症傾向、外向性、協調性、勤勉性）が教育への探求・コミットメントを予測し、対人関係については双方向であること (Klimstra et al., 2012, 2013)、(3) 成人期初期において、教育・対人関係における探求・コミットメントの変化はパーソナリティ特性の変化を予測しないこと (Boer et al., 2019) の 3 点にまとめることができる。

発達段階を考慮した投資と パーソナリティ特性の変化

Klimstra らの研究は、投資と探求・コミットメントの関係を整理し、パーソナリティ特性、アイデンティティ・プロセス研究を架橋した点で極めて意義があるが、その一方で検討すべき課題も残されている。まず、いくつかの研究は、社会投資の原則を青年期に適応しているが (e.g., Boer et al., 2019; Klimstra et al., 2012, 2013)、そもそも青年に対して、社会投資の原則をそのまま適応することに違和感がある。なぜなら、社会投資とは成人が仕事など大人としての役割に投資することである一方で、青年は大人ではないため、大人としての役

割に投資しないからである。また、パーソナリティ特性と探求・コミットメントの縦断的關係は、統計的に関連が見られたものもあれば (e.g., Hatano et al., 2017)、見られなかったものもあり (Boer et al., 2019)、一貫した結果は得られていない。

これらの課題を解決するための 1 つの方策は、発達課題 (Erikson, 1968) を考慮した上で、パーソナリティ特性の変化・発達と投資の関係を検討することである。青年期の発達課題はアイデンティティの確立であり、それは身体的、認知的、社会的関係性の変化に伴い、養育者から自立し、将来に向けて主体的に Me を確立することである (Kroger, 2004)。そのため、青年は、職業、イデオロギー、親密な友人や恋人など (e.g., Crocetti et al., 2008; Grotevant, 1987; Luyckx et al., 2008; Marcia, 1966)、自らの将来に向けて主体的な Me を確立するためにこれらに投資 (i.e., 探求・コミットメント) する。こういった投資は自己の可能性を探求することであり、社会への投資よりも、むしろ個人への投資の側面が大きい。そして、Klimstra らが主張するように、青年期の職業、イデオロギー、親密な友人や恋人への探求・コミットメントによってパーソナリティ特性が変化するのであれば、それは社会投資ではなく個人投資の原則 (personal investment principle) と呼ぶべきであると考えられる。その一方、成人期の発達課題は親密性 (intimacy)、世代性 (generativity) であり、家族になるパートナーと親密な関係を築くこと、自らの価値、信念を次の世代へと伝えていくことである。それは、家族、仕事など大人としての社会的役割に投資し、後世に伝えていくことにほかならない。そしてこれらへの投資によってパーソナリティ特性が変化することは社会投資の原則によって説明される。

このように、青年期・成人期のパーソナリティ特性の変化は、発達課題に沿った対象に投資することで促されると考えられるが、その原則は、発達段階によって区別されなければならない。実際、先行研究において、青年期のパーソナリティ特性と対人関係についての探求・コミットメントとの間に双方向の関係がみられたもの (Klimstra et al., 2013)、成人期初期においては、教育・対人関係に関する探求・コミットメントとの間に関係がみられていない (Boer et al., 2019)。この結果は、成人期初期においては、すでに教育や対人関係がパーソナリティ特性の変化を促すほど重要な対象ではなかったために、見られた違いかもしれない。

また、どのパーソナリティ特性が変化するのか、という点についても発達段階が関与すると考えられる。

成人期においては、勤勉性、外向性、協調性が特に変化するパーソナリティ特性とされているが (i.e., Roberts et al., 2006), 青年期においては、開放性と外向性が特に変化するパーソナリティ特性と考えられる。なぜなら、青年期は、自らの価値・信念・目標を探求する時期であり (Kroger, 2004), また、パーソナリティ特性において外向性、開放性が環境への適応に強く関わるからである (DeYoung, 2015)。実際、Roberts et al. (2006) において、青年期は開放性、外向性が特に高いことが示されており、また、縦断研究からも開放性、外向性は将来への探求によって予測され、逆に将来への探求を予測する結果が得られている (Hatano et al., 2017; Luyckx et al., 2014)。

さらに、発達課題に沿った対象への投資がパーソナリティ特性の変化を促すのであれば、それは青年期・成人期に限らない。実際、パーソナリティ特性はどの年代であっても変化する可能性が指摘されており (e.g., Roberts & Nickle, 2017), 生涯発達の観点からすると、人のパーソナリティ特性は常に何かしらの対象に投資することで変わるのかもしれない。例えば、児童期の発達課題は勤勉性であることから、学校生活への適応に投資することがパーソナリティ特性の変化、特に勤勉性の変化を促す可能性がある。また、老年期の発達課題は統合であることから、自己の人生について振り返り、意味づけることに投資することがパーソナリティ特性の変化に寄与するかもしれない。もしそうであるならば、発達課題への投資によってパーソナリティ特性が変化するという原則は、発達投資の原則 (developmental investment principle) と呼ぶことができるかもしれない。

おわりに—今後のパーソナリティ研究の発展に向けて

これまで、パーソナリティ特性、アイデンティティ・プロセスに関する研究を取り上げ、それらを概観してきた。その結果、成人期のパーソナリティ特性の変化・発達については社会投資の原則を支持する知見が蓄積されている一方で、青年期のパーソナリティ特性の変化は、個人投資の原則によって説明できる可能性を指摘した。さらに、発達時期・課題を考慮することで、生涯を通したパーソナリティ特性の変化・発達の解明につながる可能性について言及した。

以上を踏まえ、最後に今後のパーソナリティ研究、特に青年期における個人投資の原則およびパーソナリティの変化・発達研究を展開していく上で必要となる4点を示す。1点目は、青年期におけるパーソナリティ

特性、アイデンティティ・プロセスの発達の变化について世界各国での縦断研究を蓄積することである。Klimstra, Hale, Raaijmakers, Branje, & Meeus (2010) は、5年間の縦断データに基づき青年期のパーソナリティ特性の変化を明らかにしているが、あくまでオランダの青年に基づくデータである。パーソナリティ特性の発達傾向に社会文化的要因が関連する可能性があることを考慮すると、他の欧米圏・アジア圏の国々における青年期のパーソナリティ特性の発達傾向もまた明らかにしていく必要がある。その点については、アイデンティティ・プロセスに関しても同様である。これまで、青年期のアイデンティティ発達を縦断的に検討した研究はいくつかみられるものの、調査が実施された国は日本、オランダの2カ国のみである (日本の研究として Hatano & Sugimura, 2017; Hatano et al., 2020; オランダの研究として Klimstra, et al., 2010; Meeus et al., 2010, 2012)。これらの研究結果は一致する点もあれば一致しない点も報告されている。例えば、オランダでは青年期を通してアイデンティティ・ステータスは変化しないが、日本では変化する青年としない青年が見られる。このように、国を通しての共通性と差異を明らかにすることで、パーソナリティ特性・アイデンティティ発達の普遍性と多様性を明らかにすることが可能となる。そのために、より多様な国の縦断データを収集し、青年期のパーソナリティ特性、アイデンティティ・プロセスの可変性について検討することが必要である。

2点目は、青年期におけるパーソナリティ特性とアイデンティティ・プロセスの発達の方向性について、個人間のレベル (between-person level) ではなく個人内のレベル (within-person level) で検討を行うことである。パーソナリティ特性とアイデンティティ・プロセスの関係は、CLPM でのみ検討されてきたが (e.g., Hatano et al., 2017; Klimstra et al., 2012, 2013; Luyckx et al., 2014), 個人内での変化についての因果の方向性は検討されていない。個人間と個人内では変数間の関係は全く異なる可能性があるため (e.g., Hatano et al., 2020), 今後は両者の関係について RI-CLPM を用いた検討を進めていく必要がある。

3点目は、青年期においてパーソナリティ特性を変容させる投資の対象を同定することである。アイデンティティ・プロセスの研究において、投資の対象は領域として検討されてきた。それらは、政治的信念、宗教、職業、学業、同性友人関係、異性関係、人生設計などであるが (Crocetti et al., 2008; Grotevant, 1987; Karas & Ciecuch, 2018; Luyckx et al., 2008; Marcia, 1966), どの領域が

特にパーソナリティ特性と特に強く関わるのか未検討である。特に、領域とパーソナリティ特性との関係には文化・社会と強く関与する。例えば、日本では大学進学率が高く、学業が青年の自尊感情や適応感に強く関わっているが、これは社会での成功に学業が強く関わっているからであり (e.g., Sugimura & Mizokami, 2012), 大学進学率が高くない国においては学業よりも職業意識がパーソナリティ特性と強く関連しているかもしれない。今後は、多様な国の文化・社会状況を考慮した上で、青年にとってどのような投資が特にパーソナリティ特性の変化・発達に寄与するのかを明らかにしていく必要がある。

4点目は、パーソナリティ特性、アイデンティティ・プロセスとナラティブ・アイデンティティとの関連を検討することである。これらは全て自己システムにおける要素・全体性であるとされながらも (e.g., McAdams & Zapata-Giel, 2014), それぞれの関係についてはほとんど検討されていない。それは測定方法の違い、すなわちパーソナリティ特性、アイデンティティ・プロセスが質問紙に基づく量的データを用いていることに対して、ナラティブ・アイデンティティがそのナラティブに基づく質的データを用いるという違いに由来するかもしれない。しかしながら、近年では比較的大規模なナラティブを収集し (参加者 $N=855$; ナラティブ $N=2,565$), ナラティブをコード化し、ナラティブを定量的に分析した研究も見られる (McLean et al., 2019)。また、5次元モデルとナラティブとの共通点 (i.e., 将来に対する語りと探求・コミットメント) に着目し、ナラティブの内容と5次元モデルの得点との関係を縦断的に検討した研究も見られる (Van Doeselaar, McLean, Meeus, Denissen, & Klimstra, 2019)。パーソナリティ特性、アイデンティティ・プロセスの発達に見られるその質的变化を明らかにするためにも、それぞれとナラティブ・アイデンティティとの関係を検討する研究を積極的にすすめるべきだろう。

これらの研究の推進は、青年期におけるパーソナリティ特性、アイデンティティの変化・発達の普遍性と国ごとの独自性の解明 (第1の課題), その変化・発達に寄与する投資の対象の同定 (第2,3の課題), さらに、包括的自己システムとしてのパーソナリティの変化の解明 (第4の課題) につながると考えられる。

引用文献

- Allemand, M., Hill, P. L., & Lehmann, R. (2015). Divorce and personality development across middle adulthood. *Personal Relationships*, 22, 122-137. doi:10.1111/per.12067
- Becht, A. I., Luyckx, K., Nelemans, S. A., Goossens, L., Branje, S. J. T., Vollebergh, W. A. M., & Meeus, W. H. J. (2019). Linking identity and depressive symptoms across adolescence: A multi-sample longitudinal study testing within-person effects. *Developmental Psychology*, 55, 1733-1742. doi:10.1037/dev0000742
- Becht, A. I., Nelemans, S. A., Branje, S. J. T., Vollebergh, W. A. M., Koot, H. M., & Meeus, W. H. J. (2017). Identity uncertainty and commitment making across adolescence: Five-year within-person associations using daily identity reports. *Developmental Psychology*, 53, 2103-2112. doi:10.1037/dev0000374
- Bliedorn, W., Hopwood, C. J., & Lucas, R. E. (2018). Life events and personality traits change. *Journal of Personality*, 86, 83-96. doi:10.1111/jopy.12286
- Boer, L. D., Klimstra, T. A., Branje, S. J. T., Meeus, W. H. J., & Denissen, J. J. A. (2019). Personality maturation during the transition to working life: Associations with commitment as a possible indicator of social investment. *European Journal of Personality*, 33, 456-467. doi:10.1002/per.2218
- Boyce, C. J., Wood, A. M., Daly, M., & Sedikides, C. (2015). Personality change following unemployment. *Journal of Applied Psychology*, 100, 991-1011. doi:10.1037/a0038647
- Campbell, J. D., Trapnell, P. D., Heine, S. J., Katz, I. M., Lavalley, L. F., & Lehman, D. R. (1996). Self-concept clarity: Measurement, personality correlates, and cultural boundaries. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 141-156. doi:10.1037/0022-3514.70.1.141
- Côté, J. E., & Bynner, J. M. (2008). Changes in the transition to adulthood in the UK and Canada: The role of structure and agency in emerging adulthood. *Journal of Youth Studies*, 11, 251-268. doi:10.1080/13676260801946464
- Côté, J. E., & Levine, C. G. (2016). *Identity formation, youth, and development: A simplified approach*. New York: Psychology Press.
- Crocetti, E., & Meeus, W. (2014). The identity statuses: Strengths of a person-centered approach. In K. C. McLean & M. Syed (Eds.), *The Oxford handbook of*

- identity development* (pp. 97-114). New York: Oxford University Press. doi:10.1093/oxfordhb/9780199936564.013.016
- Crocetti, E., Rubini, M., & Meeus, W. (2008). Capturing the dynamics of identity formation in various ethnic groups: Development and validation of a three-dimensional model. *Journal of Adolescence*, 31, 207-222. doi:10.1016/j.adolescence.2007.09.002
- DeYoung, C. G. (2015). Cybernetic big five theory. *Journal of Research in Personality*, 56, 33-58. doi:10.1016/j.jrp.2014.07.004
- Elliot, A. J. (1999). Approach and avoidance motivation and achievement goals. *Educational Psychologist*, 34, 169-189. doi:10.1207/s15326985ep3403_3
- Erikson, E. H. (1968). *Identity, youth and crisis*. New York: Norton.
- Erikson, E. H. (1980). *Identity and the life cycle*. Psychological issues Vol. 1, No. 1, Monograph 1. New York: International Universities Press. (エリクソン, エリク・H. 西平 直・中島由恵(編訳)(2011). アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- Gallagher, R. V., McLean, K. C., & Syed, M. (2017). An integrated developmental model for studying identity content in context. *Developmental Psychology*, 53, 2011-2022. doi:10.1037/dev0000299
- Grotevant, H. D. (1987). Toward a process model of identity formation. *Journal of Adolescent Research*, 2, 203-222. doi:10.1177/074355488723003
- Hamaker, E. L., Kuiper, R. M., & Grasman, R. P. (2015). A critique of the cross-lagged panel model. *Psychological Methods*, 20, 102-116. doi:10.1037/a0038889
- 畑野 快 (2018). 海外におけるアイデンティティ研究の動向 高坂康雅(編) ノードとしての青年期 (pp. 88-89) ナカニシヤ出版
- 畑野 快 (2019). 青年期のアイデンティティ 児童心理学の進歩, 58, 125-155.
- Hatano, K., & Sugimura, K. (2017). Is adolescence a period of identity formation for all youth? Insights from a four-wave longitudinal study of identity dynamics in Japan. *Developmental Psychology*, 53, 2113-2126. doi:10.1037/dev0000354
- Hatano, K., Sugimura, K., Crocetti, E., & Meeus, W. (2020). Diverse-and-dynamic pathways in educational and interpersonal identity formation during adolescence: Longitudinal links with psychosocial functioning. *Child Development*, 91, 1203-1218. doi:10.1111/cdev.13301
- Hatano, K., Sugimura, K., & Klimstra, T. (2017). Which came first: Personality traits or identity processes during early and middle adolescence? *Journal of Research in Personality*, 67, 120-131. doi:10.1016/j.jrp.2016.06.014
- Hatano, K., Sugimura, K., & Luyckx, K. (2020). Do identity processes and psychosocial problems intertwine with each other? Testing the directionality of between- and within-person associations. *Journal of Youth and Adolescence*, 49, 467-478. doi:10.1007/s10964-019-01182-0
- Hihara, S., Ishibashi, I., Umemura, T., & Sugimura, K. (2019). Roles of configurations of multiple identity domains in adaptive and maladaptive functioning in Japanese emerging adults: Using a culturally relevant index. *Emerging Adulthood*. doi:10.1177/2167696819858457
- Hihara, S., Sugimura, K., & Syed, M. (2018). Forming a negative identity in contemporary society: Shedding light on the most problematic identity resolution. *Identity: An International Journal of Theory and Research*, 18, 325-333. doi:10.1080/15283488.2018.1524329
- Hihara, S., Umemura, T., & Sugimura, K. (2019). Considering the negatively formed identity: Relationships between negative identity and problematic psychosocial beliefs. *Journal of Adolescence*, 70, 24-32. doi:10.1016/j.adolescence.2018.11.002
- Hudson, N. W., Briley, D. A., Chopik, W. J., & Derringer, J. (2019). You have to follow through: Attaining behavioral change goals predicts volitional personality change. *Journal of Personality and Social Psychology*, 117, 839-857. doi:10.1037/pspp0000221
- Hudson, N. W., Roberts, B. W., & Lodi-Smith, J. (2012). Personality trait development and social investment in work. *Journal of Research in Personality*, 46, 334-344. doi:10.1016/j.jrp.2012.03.002
- James, W. (1890/1950). *The principles of psychology*. New York: Dover.
- Karaś, D., & Cieciuch, J. (2018). The relationship between identity processes and well-being in various life domains. *Personality and Individual Differences*, 121, 111-119. doi:10.1016/j.paid.2017.09.027

- 加藤弘通・太田正義・松下真美子・三井由里 (2018). 思春期になぜ自尊感情が下がるのか?—批判的思考態度との関係から 青年心理学研究, 30, 25-40. doi:10.20688/jsyap.30.1_25
- Klimstra, T. A., Hale III, W. W., Raaijmakers, Q. A. W., Branje, S. J. T., & Meeus, W. H. J. (2010). Identity formation in adolescence: Change or stability? *Journal of Youth and Adolescence*, 39, 150-162. doi:10.1007/s10964-009-9401-4
- Klimstra, T. A., Luyckx, K., Branje, S., Teppers, E., Goossens, L., & Meeus, W. H. (2013). Personality traits, interpersonal identity, and relationship stability: Longitudinal linkages in late adolescence and young adulthood. *Journal of Youth and Adolescence*, 42, 1661-1673. doi:10.1007/s10964-012-9862-8
- Klimstra, T. A., Luyckx, K., Germeijs, V., Meeus, W. H., & Goossens, L. (2012). Personality traits and educational identity formation in late adolescents: Longitudinal associations and academic progress. *Journal of Youth and Adolescence*, 41, 346-361. doi:10.1007/s10964-011-9734-7
- Klimstra, T. A., Noffle, E. E., Luyckx, K., Goossens, L., & Robins, R. W. (2018). Personality development and adjustment in college: A multifaceted, cross-national view. *Journal of Personality and Social Psychology*, 115, 338-361. doi:10.1037/pspp0000205
- Klimstra, T. A., & Van Doeselaar, L. V. (2017). Identity formation in adolescence and young adulthood. In J. Specht (Ed.), *Personality development across the life span* (pp. 293-308). London, UK: Academic Press. doi:10.1016/B978-0-12-804674-6.00018-1
- 畑野亜紀 (2019). 学生の自己評価による自己特性に関する研究 (3)—保育者を目指す短大生の2年間の変容について 日本教育心理学会第61回総会発表論文集, 453. doi:10.20587/pamjaep.61.0_453
- Kroger, J. (2004). *Identity in adolescence: The balance between self and other* (3rd ed.). London, New York: Routledge.
- Lehnart, J., Neyer, F. J., & Eccles, J. (2010). Long-term effects of social investment: The case of partnering in young adulthood. *Journal of Personality*, 78, 639-670. doi:10.1111/j.1467-6494.2010.00629.x
- Leikas, S., & Salmela-Aro, K. (2015). Personality trait changes among young Finns: The role of life events and transitions. *Journal of Personality*, 83, 117-126. doi:10.1111/jopy.12088
- Lodi-Smith, J., & Roberts, B. W. (2007). Social investment and personality: A meta-analysis of the relationship of personality traits to investment in work, family, religion, and volunteerism. *Personality and Social Psychology Review*, 11, 68-86. doi:10.1177/1088868306294590
- Lodi-Smith, J., Spain, S. M., Cologgi, K., & Roberts, B. W. (2017). Development of identity clarity and content in adulthood. *Journal of Personality and Social Psychology*, 112, 755-768. doi:10.1037/pspp0000091
- Luyckx, K., Klimstra, T. A., Schwartz, S. J., & Duriez, B. (2013). Personal identity in college and the work context: Developmental trajectories and psychosocial functioning. *European Journal of Personality*, 27, 222-237. doi:10.1002/per.1903
- Luyckx, K., Schwartz, S. J., Berzonsky, M. D., Soenens, B., Vansteenkiste, M., Smits, I., & Goossens, L. (2008). Capturing ruminative exploration: Extending the four-dimensional model of identity formation in late adolescence. *Journal of Research in Personality*, 42, 58-82. doi:10.1016/j.jrp.2007.04.004
- Luyckx, K., Teppers, E., Klimstra, T. A., & Rassart, J. (2014). Identity processes and personality traits and types in adolescence: Directionality of effects and developmental trajectories. *Developmental Psychology*, 50, 2144-2153. doi:10.1037/a0037256
- Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558. doi:10.1037/h0023281
- Markus, H., & Nurius, P. (1986). Possible selves. *American Psychologist*, 41, 954-969.
- McAdams, D. P., & Pals, J. (2006). A new Big Five: Fundamental principles for an integrative science of personality. *American Psychologist*, 61, 204-217. doi:10.1037/0003-066X.61.3.204
- McAdams, D. P., & Zapata-Gietl, C. (2014). Three standards of identity development across the human life course: Reading Erik Erikson in full. In K. C. McLean & M. Syed (Eds.), *The Oxford handbook of identity development* (pp. 81-94). New York: Oxford University Press. doi:10.1093/oxfordhb/9780199936564.013.006
- McLean, K. C., & Breen, A. V. (2009). Processes and content in narrative identity development in adoles-

- cence: Gender and well-being. *Developmental Psychology*, 45, 702-710. doi:10.1037/a0015207
- McLean, K. C., Syed, M., Pasupathi, M., Adler, J. M., Dunlop, W. L., Drustup, D., ... McCoy, T. (2019). The empirical structure of narrative identity: The initial big three. *Journal of Personality and Social Psychology*. doi:10.1037/pspp0000247
- Meeus, W. H. J. (2018). *Adolescent development: Longitudinal research into the self, personal relationships, and psychopathology*. London, UK: Routledge.
- Meeus, W., Van de Schoot, R., Keijsers, L., & Branje, S. (2012). Identity statuses as developmental trajectories: A five-wave longitudinal study in early-to-middle and middle-to-late adolescents. *Journal of Youth and Adolescence*, 41, 1008-1021. doi:10.1007/s10964-011-9730-y
- Meeus, W., Van de Schoot, R., Keijsers, L., Schwartz, S. J., & Branje, S. (2010). On the progression and stability of adolescent identity formation: A five-wave longitudinal study in early-to-middle and middle-to-late adolescence. *Child Development*, 81, 1565-1581. doi:10.1111/j.1467-8624.2010.01492.x
- Mercer, N., Crocetti, E., Branje, S., van Lier, P., & Meeus, W. (2017). Linking delinquency and personal identity formation across adolescence: Examining between- and within-person associations. *Developmental Psychology*, 53, 2182-2194. doi:10.1037/dev0000351
- 無藤清子 (1979). 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性. *教育心理学研究*, 27, 178-187. doi:10.5926/jjep1953.27.3_178
- Nagin, D. S. (2005). *Group-based modeling of development*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 西脇 良 (2004). 日本人の宗教的自然観 ミネルヴァ書房
- Phinney, J. S., & Baldelomar, O. A. (2011). Identity development in multiple cultural contexts. In L. A. Jensen (Ed.), *Bridging cultural and developmental approaches to psychology: New syntheses in theory, research, and policy* (pp. 161-186). New York: Oxford University Press. doi:10.1093/acprof:oso/9780195383430.003.0008
- Roberts, B. W., & Nickel, L. B. (2017). A critical evaluation of the Neo-Socioanalytic model of personality. In J. Specht (Ed.), *Personality development across the lifespan* (pp. 157-177). London, UK: Academic Press. doi:10.1016/B978-0-12-804674-6.00011-9
- Roberts, B. W., Walton, K. E., & Viechtbauer, W. (2006). Patterns of mean-level change in personality traits across the life course: A meta-analysis of longitudinal studies. *Psychological Bulletin*, 132, 1-25. doi:10.1037/0033-2909.132.1.1
- 島津直美・中村玲子・越川房子 (2019). 反応スタイルと抑うつ の 2 時点研究. *日本教育心理学会第 61 回総会発表論文集*, 454. doi:10.20587/pamjaep.61.0_454
- 杉村和美 (1998). 青年期におけるアイデンティティの形成—関係性の観点からのとらえ直し. *発達心理学研究*, 9, 45-55. doi:10.11201/jjdp.9.45
- Sugimura, K. (2020). Adolescent identity development in Japan. *Child Development Perspectives*, 14, 71-77. doi:10.1111/cdep.12359
- Sugimura, K., Matsushima, K., Hihara, S., Takahashi, M., & Crocetti, E. (2019). A culturally sensitive approach to the relationships between identity formation and religious beliefs in youth. *Journal of Youth and Adolescence*, 48, 668-679. doi:10.1007/s10964-018-0920-8
- Sugimura, K., & Mizokami, S. (2012). Personal identity in Japan. *New Directions for Child and Adolescent Development*, 138, 123-143. doi:10.1002/cad.20025
- Syed, M., & McLean, K. (2016). Understanding identity integration: Theoretical, methodological, and applied issues. *Journal of Adolescence*, 47, 109-118. doi:10.1016/j.adolescence.2015.09.005
- Takahashi, Y., Edmonds, G. W., Jackson, J. J., & Roberts, B. W. (2013). Longitudinal correlated changes in conscientiousness, preventative health-related behaviors, and self-perceived physical health. *Journal of Personality*, 81, 417-427. doi:10.1111/jopy.12007
- 高橋雄介・山形伸二・星野崇宏 (2011). パーソナリティ特性研究の新展開と経済学・疫学など他領域への貢献の可能性. *心理学研究*, 82, 63-76. doi:10.4992/jjpsy.82.63
- Van Doeselaar, L., McLean, K. C., Meeus, W. H. J., Denissen, J., & Klimstra, T. (2019). Adolescents' identity formation: Linking the narrative and the dual-cycle approach. *Journal of Youth and Adolescence*, 49, 818-835. doi:10.1007/s10964-019-01096-x
- Van Scheppingen, M. A., Jackson, J. J., Specht, J.,

- Hutteman, R., Denissen, J. J. A., & Bleidorn, W. (2016). Personality trait development during the transition to parenthood: A test of social investment theory. *Social Psychological and Personality Science*, 7, 452-462. doi:10.1177/1948550616630032